

わたしの好きな昔話（6）

『浦島』(ちりめん本)



末神 和香



私を取り上げるのは、日本で最もよく知られている昔話のひとつ『浦島』です。現在私たちが絵本などで見ることのできる『浦島太郎』はこういった筋書きです。いじめられていた亀を助けた浦島がその亀の背に乗り竜宮へ行き、楽しく過ごします。家に帰りたくなった浦島は乙姫から玉手箱をもらい元の世界に戻りますが、そこでは既に何百年もの時が流れており、とうとう玉手箱を開けてしまった浦島は老人になってしまいます。

1886年にバジル・ホーン・チェンバレンによって翻訳されたこのちりめん本の『浦島』は、後半の筋書きは同じですが、現在とは少し設定が異なっています。まず、彼は自分で釣った亀を逃がしますが、その亀は海神の娘（つまり乙姫）の化身でした。そして彼は娘と結婚し、3年間の幸せな生活の後、浦島は「家族に会うため、少しの間竜宮を離れたい」と言い、玉手箱を受け取り元の世界に戻ります。長い間伝承され、子供に向けた昔話へと変化する中で、より

わかりやすく子供たちにとって身近な設定へと変えられてきたのでしょう。

『浦島』は、元々は『日本書紀』『万葉集』など古い文献にも登場し、御伽草子として全国で流布した話であるそうです。「決して開けてはならない」と言われた玉手箱を開けたことで、浦島は一気に年をとり死んでしまいます。約束を破ることへの戒めとして伝えられてきたと考えられますが、私には見知った人が誰もいない世界で生きていく辛さからの救いとも思えます。

また、小林永濯の挿絵からもわかるように、『浦島』は日常とは別世界である竜宮を描いた幻想的なお話でもあります。竜宮では時の流れが止まっていて、楽しい時間が永遠に続くように思われます。古くから人々は遠い海の彼方、もしくは深い海の底にあると言われるこうした世界を思い浮かべ信じてきたのです。私は海から遠い場所で生まれ育ったので、こういった美しい海の情景にあこがれながらこのお話に触れてきました。表紙には、美しい海神の娘と浦島に仕える女官たちが、着物を着た魚や蟹などといったユーモラスな姿で描かれています。歌に「鯛や平目の舞い踊り」とあるように、さまざまな海の生き物たちが人間のように暮らしている竜宮を空想していた昔の人々の感性は、現在でも色褪せることなく語り継がれています。私は本を読むのと同じくらい絵を見るのが好きなので、こういったさまざまに描かれた楽しい挿絵を見ることができると、ちりめん本の魅力のひとつだと思います。



すえがみ わか（英米語学科4年次生）